

平成23年度「東日本大震災からの復旧・復興を担う専門人材育成支援事業」実績報告書

1. 事業の概要

(1)事業名(全角30字以内)

被災地の子どもたちの心身の回復と成長をケアする人材育成

(2)メニュー・分野

| メニュー | | 分野 |
|------|--|----|
| | 1-① 産業界の高度化等において必要な専門人材育成のための人材育成コース試行導入等【短期】 | |
| | 1-② 産業界の高度化等において必要な専門人材育成のための人材育成コース試行導入等【中長期】 | |
| ○ | 2 被災地においてニーズが高く供給が不足する分野の教育支援 | |
| | 3 専修学校等の就職支援体制の充実強化 | — |

「その他」分野名

(4)事業実施期間

契約日～平成24年3月30日

(5)事業の概要

東日本大震災によって多くの人々がPTSDなど深刻な精神的ダメージを受けている。なかでも、小中学生の児童・生徒においては、その影響は大きく長期的かつ効果的な治療やケアが必要である。さらに、福島の子供は、福島第一原子力発電所の事故による放射能の影響により、屋外の活動が著しく制限されており、本来の児童生徒の成長に必要な日常生活をおくることができず、重大かつ、終わりの見えない長期的なストレスにさらされている。そこで、効果的とされるのが、馬等動物を用いた動物介在療法(アニマルセラピー)と感覚統合療法を用いたリハビリならびにケアである。

本プログラムでは、実際に福島県等の児童に動物介在療法と感覚統合療法を受けてもらい、効果を実証し、その過程を専門学校の学生も体験し、教育的効果を基に作業療法士、理学療法士、介護福祉士達はその内容と効果を学ぶ事ができるカリキュラムの構築を行う。これによって、東日本大震災における壊滅的な被害を受けた被災地の子ども達(人々)の心身の回復と成長を継続的な支援を行うことのできる専門人材を育成するプログラム開発を目指すものである。

2. 文部科学省との連絡担当者

省略

3. 事業内容の説明

(1) 事業の内容について(推進協議会における具体的な取組内容)

プログラム等の概要

本来、医療分野における専門教育はそれぞれの分野の専門知識を学ぶカリキュラムで構成されている。これはすなわち、医療分野が対象としている、高齢者、障がい者等の病気や心身のケアを中心とした知識、技術が中心であると言える。これまで、我々が取り組んできた動物介在療法と感覚統合の融合は、基本的に「人」が対象であるが、具体的な対象者として捉えてきたのは「発達障害」を持った子ども達を中心としてきた。

しかし、今回の震災は、幅広い子ども達に対してのケアが必要である。それゆえ、これまでのカリキュラムにはない特徴のあるプログラムの構築が必要である。

そのために、幅広い分野において教育できるプログラム開発を目指す。具体的な内容は、動物介在療法と感覚統合を融合させたPTSD等を抱えた子ども(人)の心身の回復と成長を目的とする療法とする。15回の講義と実習を基本とするプログラムである。

対象者は、医療系全般が望ましいが、当面の対象者としては、介護福祉士、保育士、社会福祉士、精神保健福祉士、理学療法士、作業療法士の養成カリキュラムに組み込まれるのが望ましいと考えている。

具体的な事業

こうした教育プログラムの作成を行ったが、今年度は、基礎概論部分の構築に思いをおいた。また、こうした子ども達の影響と学生が教育プログラム(科目)として習得する場合に必要なと思われる、実習形式の学習を兼ねて、福島の子供達を対象としたセラピーキャンプを実施した。当初は長期的な関わり(キャンプ)を計画し、通所型で長期間のセラピーを目指したが、子ども達の状況と、実施時期が冬季であり、現地福島での実施は雪の為困難であった為、気候的に比較的穏やかで子ども達が春休みの3月末に1週間の実証セラピーキャンプを実施した。

(2) 教育プログラム・教材の開発内容等

①動物介在療法の概論的内容の構築を行った。

②感覚統合療法の概論的内容の構築を行った。

③動物介在療法と感覚統合療法を融合させた理論の導入(概論)を作成した。

④学生の臨床実習と馬等動物介在療法と感覚統合療法の実証を合わせた児童のセラピー・ケアのキャンプを行った。

ただし、本来なら長期的に継続するケアプログラムを実証する必要があるが、今回は震災地区が冬季中のため、期限間近の3月下旬に実証活動を行う予定である。そこで、過去に沖縄にて実証した結果に基づき、福島県等の児童によるセラピープログラムを現地で実施検討し、模擬的な実証訓練を行うことによって、教育的要素を取り入れた作業療法士、理学療法士、介護福祉士等、学生ボランティアをスタッフに加えて、効果的に震災被害に対応できる専門人材の育成プログラム検証を行った。

(3) 実証講座等の内容

川嶋委員による動物介在療法の効果について

被災地の子どもたちの心身の回復と成長をケアするうえで、動物介在療法がどういった効果を与えるかについて講義を行った。

参加者

広島医療保健専門学校

理学療法学科 41名(2年)

作業療法学科 30名(2年)

保育介護学科 1名(2年)

教員 2名

合計 74名

土田委員による感覚統合療法の効果について

被災地の子どもたちの心身の回復と成長をケアするうえで、感覚統合療法がどういった効果を与えるか、動物介在療法との融合の効果について講義を行った。

川嶋委員による動物介在療法の効果について

被災地の子どもたちの心身の回復と成長をケアするうえで、動物介在療法がどういった効果を与えるかについて講義を行った。

参加者

作業療法学科 28名(2・3年)郡山健康科学専門学校

介護福祉士学科 2名(1年)金沢福祉専門学校

教員 4名

合計 34名

(4) 事業実績について(地域の人材ニーズに対しての具体的な事業成果)

被災地のニーズ

3月11日に起こった東日本大震災によって、被災地区の人々は何らかのPTSDを抱え、さらに、福島第一原発の事故の影響で、住み慣れた地区を離れ、人々の繋がりも断たれている。特に、福島県では、子どもの(その家族)の県外流出が著しく、放射能の影響が大きな課題になっている。

この度の我々の研究での調査によると、福島の子どもの状況は、震災当初、非常に攻撃的で言動ともに激しさが目立っており、いわゆる多動的な状況であった。しかし、夏休み頃になると、初期の多動性は薄れ、色白で静かな状態(やや陰の状態)に変化していた。これは、特に小学校低学年以下に顕著にみられるが、極力外に出ない生活、本来なら、屋外で遊びまわる時期に、外出を制限され他の子ども達との接触が著しく少なくなったことが、原因と推測された。現在はそれが、日常的になりつつある状況で、この状態が続くことの子ども達への影響は計り知れない。こうした子ども達へのセラピーのニーズが高まっていると認識された。

こうした教育プログラムの作成を行ったが、今年度は、基礎概論部分の構築に思いをおいた。また、こうした子ども達の影響と学生が教育プログラム(科目)として習得する場合に必要と思われる、実習形式の学習を兼ねて、福島の子ども達を対象としたセラピーキャンプを実施した。当初は長期的な関わり(キャンプ)を計画し、通所型で長期間のセラピーを目指したが、子ども達の状況と、実施時期が冬季であり、現地福島での実施は雪の為困難であった為、気候的に比較的穏やかで子ども達が春休みの3月末に1週間の実証セラピーキャンプを実施した。そこでの成果として、福島の子ども達にとって、動物介在療法と感覚統合した療育が効果的であったことが実証できた。

(5)成果の普及・平成24年度以降の事業展開(自校・他校・企業・団体・地域との関係)

次年度以降における課題として、4つの項目がある。

- ①動物介在療法と感覚統合を融合させた教育プログラムの充実と開発・展開
- ②対象者の領域の再構築(子ども達とその家族等)
- ③教育プログラムの汎用性の検討と普及について
- ④実習における学生の教育効果についての具体的検証

次年度以降に際しても、セラピーキャンプ等の具体的な取り組みより、現実のニーズや効果を検証しつつ、その内容をプログラムに取り入れることによって、より質の高い教育プログラムの構築を目指したい。

今回の成果は、報告書にまとめ、医療福祉系学科を有する専門学校、及び大学450校に発送した。本来ならば、インターネットを通じてこの取り組みを公表し理解を深める方法を用いるが、この度は実施期間が短期間のため、HP等への掲載ができなかった。今後は、こうしたHP等の取り組みも行っていきたい。

また、具体的教育プログラムの普及としては、今回関係した学校等で積極的に取り組み、成果を上げることにより、他校へのプログラム提供に結び付けたい。幸いにして、今回の事業に参加している学校は、幅広い地域にわたっており、各校の取り組みが普及の大きな力となると考える。

また、今回実施した被災地(福島)の子ども達を対象にしたセラピーキャンプを継続的に実施したい。

4. 事業のスケジュール

| | 1月 | | | | | 2月 | | | | | 3月 | | | | |
|-------|----|----|----|----|---|----|----|----|----|---|----|----|----|----|---|
| | 初旬 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 末 | 初旬 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 末 | 初旬 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 末 |
| 協議会 | | | | ● | | ● | | | | | | | | | ● |
| 分科会 | | | | | | | ● | ● | ● | | | | | | |
| 調査 | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | |
| 開発 | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | |
| 実証講座 | | | | | | | | | ● | | | | | | ● |
| 成果発表会 | | | | | | | | | | | | | | | ● |

5. 事業実施体制

(1) 推進協議会の構成

| 組織名 | 代表者 | 役割等 | 都道府県 |
|---------------------|-------|------|------|
| 広島医療保健専門学校 | 古澤 幸治 | 委員長 | 広島県 |
| (学)こおりやま東都学園 | 大本 研二 | 協議委員 | 福島県 |
| 専門学校琉球リハビリテーション学院 | 儀間 智 | 協議委員 | 沖縄県 |
| 東京農業大学 農学部 | 川嶋 舟 | 協議委員 | 東京都 |
| 県立広島大学 保健福祉学部 | 土田 玲子 | 協議委員 | 広島県 |
| 中国デザイン専門学校 | 平田 眞一 | 協議委員 | 岡山県 |
| NPO法人 インフォメーションセンター | 寄田 勝彦 | 協議委員 | 沖縄県 |
| 金沢福祉専門学校 | 越中屋 薫 | 協議委員 | 石川県 |
| 札幌リハビリテーション専門学校 | 前鼻 英蔵 | 協議委員 | 北海道 |
| 明治学院大学 教養教育センター | 猪瀬 浩平 | 協議委員 | 東京都 |

(2) 分科会の構成(設置は任意)

| 組織名 | 代表者 | 役割等 | 都道府県 |
|---------------------|-------|---------------|------|
| 広島医療保健専門学校 | 古澤 幸治 | 調査・プログラム・成果普及 | 広島県 |
| (学)こおりやま東都学園 | 大本 研二 | 調査・成果普及 | 福島県 |
| 東京農業大学 農学部 | 川嶋 舟 | 調査・プログラム・成果普及 | 東京都 |
| 中国デザイン専門学校 | 平田 眞一 | 調査・プログラム・成果普及 | 岡山県 |
| NPO法人 インフォメーションセンター | 寄田 勝彦 | 調査・プログラム | 沖縄県 |
| 広島医療保健専門学校 | 森川 敦子 | 調査・プログラム | 広島県 |
| 金沢福祉専門学校 | 越中屋 薫 | 調査・プログラム | 石川県 |
| 専門学校琉球リハビリテーション学院 | 儀間 智 | 調査・プログラム | 沖縄県 |
| 札幌リハビリテーション専門学校 | 前鼻 英蔵 | 調査・プログラム・成果普及 | 北海道 |
| 明治学院大学 教養教育センター | 猪瀬 浩平 | プログラム | 東京都 |
| NPO法人 インフォメーションセンター | 原田 麻衣 | 調査・プログラム・成果普及 | 東京都 |
| NPO法人 インフォメーションセンター | 小林 幸恵 | 調査・プログラム | 東京都 |

(3) 事業実施協力専修学校・企業・団体等

| 組織名 | 代表者 | 役割等 | 都道府県 |
|---------|-----|--------------|------|
| 福島県猪苗代町 | | 実証セラピーキャンプ支援 | 福島県 |

(4)事業の推進体制(図示)

